

## バッハ《宗教歌曲集》10 曲を歌って

平良 栄一

ツィルヒ先生から、シェメツリ歌曲（バッハ宗教歌曲集）をやらないかと言われたのが、10年前でした。それから来日されるたび、少しずつレッスンを受け、今回のリサイタルにたどりつきました。

リサイタルの日取りが決まり、最初は覚えるのが無理だし、どうせ楽譜を見るのだからと思って準備を始めました。ところが、ドイツ語の正確な発音や細かいニュアンスの表現は、長い経験を通してこそ出来ることであり、覚えないと自分の表現にはならないと思い、覚え始めました。それから歌詞の意味とイメージを、“太陽は いまや ひと日を 終え”

(No.2) ではミレーの「晩鐘」、 “なが かたえに 立たん” (No.14) ではジョルジョーネの「牧人の礼拝」の絵を見ながら結びつけるようにし、少しずつ自分の中に入ってくるような気がしました。

今回は久しぶりのリサイタルであり、またドイツ語ということでもあって、まさに “なにゆえ 嘆く” (No.55) そのものの日々でしたが、そうしているうちに、全部の歌詞が 1600～700 年代にあっては、神を信じている人々にとって当たり前の言葉だと気づき、少し得をした感じになりました。歌い終えてホッとしております。

最後になりましたが、曲の解釈では、大村恵美子

先生からのご指導を、心から感謝しております。ありがとうございました。

平良栄一テノールリサイタル

(4月19日、王子ホール)

テノール●平良栄一

ピアノ/ポジティーヴ●ヨゼフ・ツィルヒ

チェロ●クレメンス・ドル

バッハ《シェメツリ宗教歌曲集》より

No.2 照り輝く愛する太陽

No.14 汝の飼葉桶のそばに私は立って

No.23 されば汝は今きたもうや、わがイエス

No.29 すべての善きものの源泉

No.32 エホバよ、汝に向かってわれ歌わん

(ヴィヴァルディ/チェロとピアノのためのソナタ 変ロ長調)

No.34 愛する心よ、いざ思え

No.46 忠実に沈黙を守り

No.55 おお魂よ、何故に悲しむや

No.59 甘き死よ来たれ

No.37 神はなお生きたもう

イタリア古典歌曲集

スカルラッティ/すみれ

スカルラッティ/愛しく甘い

スカルラッティ/私を傷つけるのをやめるか

スカルラッティ/陽はガンジスより

ペルゴレージ/もし貴方が私を愛してくれて

マルティーニ/愛の喜びは

(〈愛の喜びは〉のテーマによるピアノ即興演奏)

ジョルダーニ/愛しい人よ

平良栄一氏 クレメンス・ドル氏

## リサイタルを聴いて

大村恵美子

4月14日19時、銀座・王子ホール。会場が満席でした。テノール独唱、チェロ、ピアノとオルガンによるプログラム構成がまずとてもよく、全体が生き生きと変化に富んで、合唱団からも20名近くが伺いましたが、みんなが楽しかった、と喜んで帰りました。

バッハの作品は、長年のご研鑽のあとがしのばれ、平良さんのお声の美しさもさることながら、誠実、善良、真摯な平良さんのお人柄がバッハの深みをよく表現していらして、とても心にしみいる歌でした。それが1曲ごとに、それぞれの個性をあざやかに写し出してお見事でした。

後半のイタリア歌曲は、これまで一度も経験したことのないほど歌が生きていて、日ごろ歌のレッスンなどで初心者の教材として乱暴に利用されているのがけしからぬという思いを抱きました。ここではバッハのように器楽的な規制がなく、美しく力強いりっぱなお声を堪能させていただくことができました。近いうち、何かオペラでお歌いになることがあったら、ぜひ聴かせていただきたいと思います。

それにしても、私たちはこの何年か、さくらの花の終わりそうなたけなわの春の宵に、渡邊明氏、佐伯雅巳氏、また平良栄一氏と、深い人生の喜びを満喫できるような歌曲の夕べに、たびたび心を暖められてきました。4月14日も、何年かぶりに夜の銀座のネオンの下を何人かとそぞろ歩きながら、こんなに心地よいことが世にあることの不思議さを、つくづく感謝して帰ったのでした。

### 東京バッハ合唱団創立 38 周年 記念懇親会のご案内

例年行われます記念懇親会は、今年に限って、J.S. バッハの没後 250 年記念も兼ね、下記のような催しとなりました。合唱団の団友、後援会員、団員の皆様に加えて、一般の方々にも呼びかけ、公開の場といたしますので、この月報紙上のごあいさつをもって御案内状に代えさせていただきます。

団友、後援会員の方々には、返信用のはがきを同封いたしますので、ご出席の有無のほか、アドレス

等の確認のため、ご欠席の方も、お手数ですが返信はがきをお届けいただけますよう、お願い申し上げます。

なお、一般の方々には、当日直接会場にいらしても歓迎いたしますが、軽食等の準備もあり、あらかじめ御一報いただければ、なおありがたく存じます。

### 東京バッハ合唱団創立 38 周年記念懇親会 —バッハを気軽に語り合う会—

日時=2000年7月3日(月) 18:30-20:30

会場=目白聖公会 (JR 山手線・目白駅下車 6 分)

会費=3000 円 (当日受付)

○ パネルトーク<私のバッハ体験>

参加予定=小杉茂雄・鈴木徹太郎・原田二郎・青木道彦の各氏 (いずれも後援会員)

○ 会食と懇談会

○ 記念に簡易製本の『カントル・バッハ』(ポール・デュ・ブシェ著、大村恵美子訳)をお持ち帰りいただきます。

○ この会にご参加なさらない方でも、上記の本をご希望の方は、送料共 1200 円でお分けします。合唱団事務局までお申し込みください。

### バッハ・カンタータ 50 曲選 出版ニュース No.3

3月中旬にBWV16、56、106、156の4冊が出来上がり、お申し込みの方々にはすでに発送されました。今期の残る6冊は、5月14日の定期演奏会の会場で発売となります。

全国の大学、教会等にお知らせしつつありますが、スタッフの限られた力ではPRもなかなかはかどりません。ご注文だけでなく、「こんなところに知らせしてほしい」というご指示も、ありがたくお受けしますので、どうぞよろしくお願ひします。第1期10曲が出揃う5月14日以後、いくつかの店頭にも並ぶ予定です。

なお、特価の期限は2000年4月30日で、その後は1年ごとに設定される価格に一本化されますので、御了承ください。

■お申込み/お問合せ先: 東京バッハ合唱団

## 第4回バッハ「宗教歌曲集」コンテスト 参加のおすすめ

第17回くばっはめいと演奏会>は、2000年7月2日(日)17:30~19:30、小田急線経堂駅前のヤマハホールと決まりました。昨年にひきつづき、この演奏会の中で、次の要領で、バッハ「宗教歌曲集」コンテストを行います。

**演奏資格:** 声楽レッスン受講者・合唱団員・音楽学生・専門家のほか、未経験者でも、当日の出演曲のみを集中学習した方でもよい。

**演奏曲目:** 大村恵美子訳詞「宗教歌曲集」の中から1曲または2曲、3節以上を歌うこと。節の選択は自由。

**出演手続:** 東京バッハ合唱団事務局あて、氏名・住所・出演曲目・ピアノ伴奏者名と共に、参加費¥3,000を納める。「宗教歌曲集」の他、従来通り独唱・独奏・合唱等、他の曲目も併せて演奏する場合は、従来通り参加費¥10,000の中に含まれる。

**申込〆切:** 6月20日

曲によっては、同一曲を複数の人数で歌ってもよく、それぞれに工夫していただけるのも、面白いと思います。主眼は、日本語の「宗教歌曲集」を、よく歌いこなして人々に伝えることです。

**評価:** 演奏されたものの中から、訳詞者(大村恵美子)がすぐれた演奏3件に対して、「宗教歌曲集」の楽譜各1冊を贈呈。ただし1ステージにつき1冊で、出演者が複数でも変わらない。

### ◇ 伴奏譜について

新バッハ全集から発行されるまでは、ペーターズ、ブライトコプフ等から、高声用・低声用と2声域に分けて、出版されているものを使用するのが一般でした。それらには、ドイツ語の歌詞が2、3節位しかついていません。また原曲の低音数字に基づいて和声づけがなされているのですが、必ずしも上出来とは限りません。今回、丸善プラネット社から発行されたものは、原書のまま、旋律と低音のみですが、低音数字に基づいて各自簡単に要所々々と和声をつけられれば、かえってゴタゴタと複雑な伴奏をつけるよ

りも原曲を生かすことになります。しかし参考にした、また自分の声域に移調したものがほしい、等のご希望のある方は、合唱団事務局でもコピーをさしあげますので、お申し出ください(出演者に限りません)。

くばっはめいと演奏会>事務局

## 後援会会計報告

(2000年1月-3月)

収入	265,200
内訳 後援会費	240,000
寄付	25,200
支出	356,246
内訳 事務局費補助	210,000
渉外費	15,000
通信費	69,188
事務費	62,058
雑費	0
差引	△91,046
前期より	200,821
累計	109,775

## 後援会にご入会の方々

(2000年1月-3月、敬称略)

### [継続会員]

松尾正子、植田高弘、谷沢 守、箕浦正敏、大滝正昭、大切幸一、椿 信子、安藤真保、森本 隆、森永毅彦、本田節子、牧 恵美子、荻野真喜子、保坂淳子、佐藤 了、二宮久子、原田二郎、小杉茂雄

### [寄付]

植田高弘、一色義子、二宮久子、西川正男

### [切手多数]

天田 繁

カントル・バッハ — 連載 17  
第 6 章 <音楽の献げもの>

ポール・デュ・ブシェ  
訳: 大村恵美子

闇の試練

しだいに終りが近づいて来ました。セバスティアンの周囲では、一夜が明けると、もうつぎの日はそれまでとは同じではなくなります。バッハは悪いほうへと向かいます。彼は日中でも目を細めて、すでに読むことも、音楽を写譜することもできません。とくに、彼は苦痛を訴えるようになります。周囲の人々は、なんとかして介護しようとしていますが、しかし不幸は訪れました。

1749年の初めには、バッハはもうほとんど全盲でした。彼の健康が低下したという噂は、ライプツィヒ中にひろがります。市参事会にとっては、いくら必要だったとはいえ、これを機会に死亡の通達を出すという、とんでもない無作法の挙に出ました。「音楽監督セバスティアン・バッハが故人となった場合の、聖トーマスの来たるべきカントル職」を引き継ぐよう、1749年6月8日、ハラーという人物を公けに審査したのです。この恥ずべき事件は最後のいじめであり、バッハにとっては最後の闘いとなりました。彼は、こんなふうに早計に追い立てられることを納得しません。ねばり強く彼は戦いをつづけ、力をふりしぼって、最愛の弟子のひとり J. クリストフ・アグリーコラとその年結婚した娘エリーザベト-

イラスト(17)

白内障の手術. R.James著『ユニヴァーサル医学辞典』の挿絵  
版画. 1746-1748年. パリ国立図書館.

ユリアーナの初子の洗礼式に立ち会うため、10月には最後の旅行さえも試みようとするのです。ハラーは出身地のドレスデンへ、いったん戻ります…。しかしバッハにとっては、闇はいっそう深まるばかりでした。

1750年3月ごろ、大きな希望が現れたように見えました。有名なイギリスの外科医がライプツィヒに立ち寄ることになったのです。ふれこみでは英国国王の<眼科医>という、勲爵士ジョン・テイラーで、おそらくは小手先の器用な、老練ないかさま師だったのでしょうか、3月28日と4月7日に、連続して手術が行なわれ、その短気な角膜手術から、バッハの視力は致命的に奪われてしまいました。その情けない人物は、2年後にもまた、バッハと同じように、ヘンデルに白内障の無駄な手術を施したのです。当時のもっとも偉大な2人のドイツ人作曲家を盲目にしようという、何たる禍いにみちた栄光!

「私は、滞在中にテイラーというイギリス人医師が珍しい手術を行なうのを見て、興味深かった。彼は、角膜または白眼の内に、半フィートほどの鉄製の小さな針を差し込んで、眼の水晶体を取り除くのだ。白内障を除く、とよばれているが、むしろ悪化させるのかもしれない。この手術は、きわめて奇妙なもので、この人物によって手練手管で施されたのだが、どうも私には、相当ないかさま師のようにも見えるのだ。」

シャルル・ド・ブロス[フランス人行政官]

「イタリアから家族に書いた手紙」1739年